

株式会社藤崎惣兵衛商店

13代続く名門酒造

社名が示す通り、代々の当主は“宗兵衛”または“惣兵衛”を名乗っているが、創業者の宗兵衛光重は江戸・元禄年間に、滋賀県猫田村（現・蒲生郡日野町猫田）で生まれた。当時の習わしとして、次男坊だったことから幼少の時に奉公に出ている。奉公先は、地元『谷田家』で、決して大きな商家ではなかったものの、薬を中心に雑貨などを扱い広く商いをしていたという。親の願いは、そこで商売の基本を学び将来は店を構えてほしい、と望んでいたようだ。

故郷の日野商人は、近江商人の中核を担う存在で、店を持たずに外へ出て歩く行商が通例。初代宗兵衛光重も中山道を利用して滋賀から信州、上州、武州へと歩いていた。その道すがら、上州の鬼石で宿をとることがしばしばあり、中山道の裏街道に当たる通りながら、当時貴重な油を燃やす裕福な家がたいそう多く、町全体が明るかったことが気に入ったようだという。

滋賀生まれの初代宗兵衛光重が遠く、上州の地で起業したのは、『谷田家』で商売を学



寄居町の本社・工場

んだ後に独立、行灯などで使う灯心（とうしみ）を売る“行商”に転じたからだろう。結婚する前の30歳代には上州鬼石（現・群馬県藤岡市＝2006年の編入合併で鬼石町は消滅）で創業を決意、1728年（享保13年）に酒造業を始め、その後に味噌・醤油を造り始めた。

初代宗兵衛光重はその後、鬼石での家業に専念し、1763年（宝暦13年）に71歳で没するが、それまでに当地で足場を固め、生前中に2代目宗兵衛光邦へと事業を引き継がせる。この2代目宗兵衛は経営手腕のあった人物で、個人商店ながら各地に支店を開設して事業の拡大を図った。記録に残っている支店だけでも埼玉県内では1756年（宝暦6年）に寄居町に出店、その後に熊谷市や群馬県高崎市、山梨県甲府市、栃木県内などにも支店を設けその範囲は関東一円に広がったという。各支店では必要に応じて熊谷や高崎は醤油製造、寄居は酒造りといったように酒や味噌、醤油をそれぞれ専門に製造する形態をとり、しかも「独立採算制で行っていたようだ」と現社長の藤崎信夫氏は話す。



戦後にキリンビールの特約店になって掲げた看板が
今でも本社正面入り口に残る



本社工場内の酵母を寝かす麹室

鬼石から寄居へ

ちなみに現在、本社となっている寄居町の酒蔵は、中西常右衛門という同郷の人物と共同所有だった施設を2代目の宗兵衛光邦が買い取り、現在まで脈々と酒造りが続いている。創業地の鬼石はその後、大戦前まで“鬼面山”という銘柄の酒を造っていたが、戦中は徴用により木工所となり戦後になって酒造業が復活。1967-68年頃まで続いたが、現在は営業部門だけを残し、寄居で製造した“鬼面山”の販売だけを行っている。従って、創業地の鬼石では酒蔵はなく、本拠地は寄居に移った。

藤崎家に残された家系図により、代々の当主の生年月日や没年月日が調べられるが、それによると2代目宗兵衛光邦は1813年（文化10年）に80歳の高齢で他界している。生まれ年を逆算すると1733年（享保18年）で、初代宗兵衛光重が41歳の時に生まれた子供になる。その当時では遅い年齢での跡取り誕生となるが、その2代目もなかなか子宝に恵まれなかったらしく、3代目を継いだ宗兵衛光弘を授かったのが43歳の時。しかし、3代目宗兵衛光弘は1813年（文化10年）に37歳の若さで没し、その同じ年に2代目宗兵衛光邦も他界しているため、それまでは親子で事業を支えて

いたのであろう。

短い後継ぎ

藤崎家は3代目以降、若くしてこの世を去る当主が多く、4代目を継いだ宗兵衛光等は1833年（天保4年）に28歳で逝去。光等の長男がまだ幼いため、その妻と再婚した新宅三男が5代目宗兵衛光度を襲名、光等の長男が成人するまで事業を引き継いだ。5代目光度には明治の時代まで長生きしたが、その間に4代目光等の長男で6代目の惣兵衛光保が1864年（元治元年）に32歳の若さで他界、長男の政太郎が7代目当主を継いだが、翌年1865年（元治2年）にわずか9歳で早世、代わって5代目光度の長男が8代目惣兵衛光得を名乗って事業を受け継いでいる。

代々世襲している宗兵衛は、この6代目から宗兵衛の“宗”の字が“惣”に変わっているが、なぜ改名されたのかについて信夫社長は「系譜から思うにあまりよいことが続いていなかったようで、一種の厄難を払う意味で行われたのではないか」言う。また、襲名の時期についても生前なのか、没後なのかは不明で、「言い伝えでは亡くなってから宗兵衛なり、惣兵衛を襲名していたようだが、はっ



看板銘柄の白扇などがこの酒造タンクで製造されている

きりしていない」と、信夫社長は話す。しかし、信夫社長の実父で11代目当主を継いだ摠兵衛勝郎は早めに襲名し、12代目の長男（信夫社長の実兄）も4年前に摠兵衛を襲名している。

艱難辛苦の時代

3代目以降、若くして当主が他界しているため、なかなか事業を発展させることができなかったようで、2代目が拡張した事業を5代目が後見人となって守り続けたものの、とうとう8代目になって衰退してしまう。それまで関東一円にあった支店を次々と失う事態になり、家業は大幅に縮小した。おそらく、後ろ盾だった5代目が亡くなったためのようだが、支配人制度も災いした。特に、山梨県甲府市にあった支店などは、その支配人に裏切られ、丸ごと奪われてしまっている。

8代目は、1894年（明治27年）に57歳で没するが、その跡を継いだのが5代目の時代から分家になっていた三郎右衛門の長男昌太郎。8代目に子供がいなかったことから当時、三郎右衛門の養子のとなっていた昌太郎（藤崎昌太光頭を襲名）が継いだ。この9代目も後継ぎを授かることなく1906年（明治39年）



慶弔用の日本酒を検査しながら箱詰めする社員



本社入り口に併設されている販売コーナー

に24歳の若さで亡くなり、10代目へとバトンタッチする。10代目の摠兵衛光孚は、滋賀県人の田波興八郎の4男で、分家の三郎右衛門の養女千枝に婿養子に入った人物。

光孚は、大正から昭和初期の激動期にも家業を守り、特に太平洋戦争の最中でも酒や醤油を造り続けた。その地道な経営が戦後になって花開くが、個人経営から法人に改組したのを見届けた1950年（昭和25年）に没する。

低迷期脱し戦後に復活

家業を法人組織にしたのは1949年（昭和24年）のことで、資本金500万円で『株式会社藤崎摠兵衛商店』を寄居町に設立。社長には光孚の実子で信夫社長の実父である勝郎氏が就任、同時に摠兵衛勝郎を襲名した。名跡を長男の英夫氏（現・監査役）に譲った後に名を勝郎に戻し、現在も健在でいる。事業を法人化させてからは、低迷していた長い時代に別れを告げ、復活を果たすが、11代目が最初に手掛けたのが各支店網の再編だった。寄居の本店は清酒製造だけを担当、高崎と熊谷の支店は醤油製造、熊谷市玉井の支店は酒造、そして創業地の鬼石は藤崎合名会社として再スタートさせている。



酒粕で製造した奈良漬

当時の製造品は、清酒が“白扇”や“鬼面山”など、醤油は“キッコータカラ”で、同時に玉井支店が1925年（大正14年）に結んでいたキリンビールとの特約店契約を戦後に本店でも特約権を取得、より一層の拡売に努めることにした。清酒とビールでは競合するような間柄だが、「酒店に納めるのは酒もビールも同じことで、当時は大日本ビールが全盛でキリンビールは誕生したばかりの存在であり、11代目が将来を見越して取り扱いを始めたのではないかと、信夫社長は振り返る。納入先は清酒の一部を東京に卸していたほかは、埼玉県北部が中心で、ビールの特約販売は今日まで続き、創業当時から製造していた味噌は戦時中の統制で廃業している。

その後、1958年（昭和33年）に資本金を1,000万円に増資、1961年（昭和36年）には2,000万円、1981年（昭和56年）に2,100万円に増額して現在に至っている。事業内容も1966年（昭和41年）には高崎と熊谷の醤油工場を統合、新たに熊谷市久保島に用地を取得して新工場を建設、操業を始めたほか、群馬県佐波郡玉村町で全酒類卸免許を取得して群馬支店として営業を開始。埼玉県比企郡吉見町や児玉郡上里町、東松山市に配送センターを開設、1992年（平成4年）には、“清酒雪の幻”を

製造する新潟県の朝妻酒造株式会社を関連会社として営業を始めた。

寄居の本社・工場は秩父線とJR八高線、東武東上線が乗り入れる寄居駅から歩いて10分程度の市街地にあり、敷地面積は約23,100平方メートル。その工場内で現在、“白扇”をはじめ“鬼面山”、“氏邦”、“彩乃玉淀”、“長瀨”などの清酒を製造している。看板銘柄の“白扇”は、澄みきった混じり気のない清酒で、“氏邦”は北条氏邦の400回忌を記念して発売。“彩乃玉淀”は町民からの公募で決まった銘柄で、地元米の“朝の光”を使用、“長瀨”は荒川上流の景勝地長瀨をイメージさせたという。本社・工場以外では、玉井支店の工場で“花遊”を、朝妻酒造で“清酒雪の幻”や“北の風雪”を製造、すべてを合わせると銘柄の数は30種類以上。年間石高は5,500石（一升瓶換算で約55万本）を越し、その約半分は埼玉県内に出荷、残りは関東甲信越地域のほか東北、北陸地方などにも卸すなど販路は広がっている。最近では海外の日本酒ブームの波を受けて、ヨーロッパにも販路を開拓、現在は米国へ輸出するための交渉を進めており、近く実現する見通しだ。



本社入り口事務室内で注文などに対応する女性社員

技で磨き、心で醸す

清酒造りの基本は、創業当初から守り続けている“技で磨き、心で醸す”という精神で、左党だけでなく若者や女性にも好まれる飲みやすい酒を目指し、日本酒ファンの拡大を図っている。そのため水にはこだわり、湯水の心配がない日本名水百選の“日本水”（やまとみず）を仕込み水とし、酒米には“山田錦”や“五百万石”、“日本晴”などを使用。酵母も厳選し、華やかな香りが持続する“泡なし酵母”を用いている。杜氏はいないが新潟県の流れをくみ、社員が生酛（きもと）造りの技術と知識を取得しているため問題はない。ただ、信夫社長は「製造社員の技術の伝承が心配」だと話し、生酛造りができる社員の育成が今後の課題となっている。

清酒以外で軌道に乗りつつあるのが焼酎の製造で、最近では酒粕を使った“彩の響”や“琥珀の響”を新発売するなど、焼酎市場にも積極的に進出。さらに、蔵元の醸造技術を応用して自然の風味を生かした奈良漬を製造するなど経営資源を広げている。

旨い酒を造るのが本道

日本酒離れと言われ出してから久しいが、



「今は営業面で転換期にある」と話す藤崎信夫社長

全国の清酒出荷量は未だ落ち込んでいる。信夫社長は、その日本酒離れを招いた一つの要因に級別を廃止したことを指摘、「やれ吟醸だ、大吟醸だ、純米だと今の分け方は分かりにくい。分類するなら日本酒と純米酒の二つだけで良いのでは」と話す。しかし、日本酒離れを食い止めるのは「とにかく旨い酒を造ることが基本だ。日々飲むものだから本物の日本酒を愛飲家に提供することが本道で、その意味では全国新酒鑑評会などで金賞を受賞することには、あまり興味がない」と言う。とは言っても、信夫社長の代になる以前には、その鑑評会に出品して見事に金賞を受賞しているのだが…。

清酒製造に限らず、100年に一度の経済危機と言われている今、製造業を中心に多難な時代に直面している。創業から今年で281年の過程で、そうした苦難の時代は幾度となく訪れ乗り切ってきたわけだが、「代々の当主に事業を続けていこうという気持ちが強かったから、今も続いているのだろう。儲けようというのではなく、いかに次の世代につなげていくか。それを歴代の当主たちが真剣に考えていたからこそ現在があるわけで、私も事業の継続を第一に据えている」と信夫社長。

しかし、ただ強い気持ちを持っているだけでは次世代にバトンタッチはできない。黙っていても、何もしなくとも商売が支障なく運ぶなら問題はないが、その時々状況に合わせて臨機応変に経営していく必要がある。当社にとって現在はまさにその過渡期にあり、「商売の基本的な考えを変えていかなければならない」と方針転換を模索している。その一つの大きな流れとして製造、販売、小売という業界の“製販三層”が今の時代には意味をなさないと言われ、製造業者という枠を取り外し、我々が経験したことのない市場に踏み

切る決断に迫られているようだ。

「今は、営業面での転換期にあると自覚している。営業スタイルを変えていかなければ10年このままでは生き残れない。多くの人材が必要だが、創業以来の“勤勉と儉約”の精神を持って新たな市場に打って出ていかなければ」と、具体的な営業活動方針の策定に乗り出す準備でいる。老舗企業だからと言って胡坐をかいていては、100年企業は達成できない。時代々に合った経営戦略が常に、その経営者に求められているようだ。

会社概要

| | |
|------|----------------------------|
| 社名 | 株式会社藤崎惣兵衛商店 |
| 所在地 | 大里郡寄居町寄居925-2 |
| TEL | 048-581-1755 |
| FAX | 048-581-1933 |
| 創業 | 1728年（享保13年） |
| 資本金 | 6,400万円 |
| 従業員 | 40人 |
| 事業内容 | 清酒・焼酎・奈良漬の製造販売 及び特約品の販売 |
| 支店 | 群馬支店 |
| 関連会社 | 朝妻酒造株式会社 |

株式会社藤崎惣兵衛商店略歴

| 年号 | 和暦 | 主な出来事 |
|-------|-------|------------------------------------|
| 1692年 | 元禄5年 | 初代、藤崎宗兵衛光重が滋賀県猫田村で誕生 |
| 1728年 | 享保13年 | 光重36歳の時、上州鬼石（現・群馬県藤岡市）で酒造業を開業 |
| 1756年 | 宝暦6年 | 埼玉県大里郡寄居町で酒造業を開業 |
| 1763年 | 宝暦13年 | 光重、死去。享年71歳 |
| 1787年 | 天明7年 | 群馬県高崎市九蔵町で醤油製造業を開業 |
| 1813年 | 文化10年 | 2代目光邦、3代目光弘が相次いで死去。光邦享年80歳、光弘享年37歳 |
| 1833年 | 天保4年 | 4代目光等、死去。享年28歳 |
| 1848年 | 嘉永元年 | 埼玉県熊谷市本町で醤油製造業を開業 |
| 1864年 | 元治元年 | 6代目光保、死去。享年32歳 |
| 1865年 | 元治2年 | 7代目政太郎が9歳で夭折 |
| 1878年 | 明治11年 | 5代目光度、死去。享年73歳 |
| 1894年 | 明治27年 | 8代目光得、死去。享年57歳 |
| 1906年 | 明治39年 | 9代目光顕、死去。享年24歳 |
| 1925年 | 大正14年 | 埼玉県熊谷市玉井で酒造業取得 |
| 1949年 | 昭和24年 | 個人経営から法人組織に改組。資本金500万円で藤崎惣兵衛商店を設立 |
| 1950年 | 昭和25年 | 10代目光孚、死去。享年69歳 |
| 1958年 | 昭和33年 | 資本金を1,000万円に増資 |
| 1961年 | 昭和36年 | 資本金を2,000万円に増資 |
| 1966年 | 昭和41年 | 熊谷支店工場を熊谷市久保島に移転し、高崎工場と統合。操業を開始 |
| 1982年 | 昭和57年 | 群馬県佐波郡玉村町に群馬支店開設 |
| 1983年 | 昭和58年 | 埼玉県比企郡吉見町に東松山配送センター設立 |
| 1988年 | 昭和63年 | 埼玉県児玉郡上里町に上里配送センター開設 |
| 1989年 | 平成元年 | 寄居町の本社に新社屋が完成 |
| 1992年 | 平成4年 | 新潟県西川町の朝妻酒造株式会社を関連会社とし、営業を開始 |
| 1995年 | 平成7年 | 東松山配送センターで全酒類卸免許を取得。東松山支店とする |
| 2005年 | 平成17年 | 資本金を6,400万円に増資 |